

なく、……相対的に還相する相対者であるから、両相対者を包摂する種の共通なる基底において、両者が対立的に媒介せられるのである。……救済の対象たるものは、他方救済の協力者たる者に対し、後進として指導強化を受ける限り先進者の還相を媒介とするのであって、自らは往相的に救われて後、更に他の後進相対者の指導教化に還相するといわなければならぬ。……往相と還相とは単に前後の定まった順序を有するのみならず、逆に還相において往相が証せられるという交互関係が存し、……この点から見れば相対は平等にして交互的なること兄弟におけると同じい。……絶対媒介の立場では一切が転換的交互的であるから、先後を保ちつつしかも同時に平等たるのである。……単なる先後でもなく単なる平等でもない兄弟的關係が世界の歴史的構造を具体的にあらわすのではないであろうか。(田辺 二〇一〇a：四一一～四一四)

こうして田辺は、倫理と歴史を超越的絶対者の「還相」によって可能となる先進的主体と後進的主体との間に成立する「兄弟的教化」の過程として把握した。戦後の田辺は、この「兄弟的教化」の原理を資本主義的民主主義と社会主義的平等との対立を総合する新しい社会構想として打ち出していった。

私は還相の概念を以てこの兄弟的教化の原理とすることにより、新しき社会原理を意味せしめることができはしないかと思う。すなわち民衆は資本主義的的市民社会の自由と社会主義の平等とを総合する兄弟性（友愛）を以て相結ばれるべきものであるといたいのである。(田辺 二〇一〇a：四一六)

田辺は「還相の思想は宗教の立場から保証を与える所があるので、特に満足を感じるのである」(『懺悔道としての哲学』田辺 二〇一〇a：四一九)と述べているが、このことはそのまま田辺の歴史・社会・政治哲学の致命的弱点となる。田辺の哲学は、それが「真宗の教義に指導せられることに依って、他力の哲学として発展」(同所)しえたがゆえに、この「真宗の教義」を共有しえないものにとって、とりわけ神学ないし宗教哲学からは距離を置いて歴史・社会・政治過程を内在的かつザッハリヒに理解したいと望む者にとって、とうてい受容することができない哲学になってしまったからである。田辺の「還相の思想」が、人類滅亡の危機の瀬戸際まで行きかけた戦後の冷戦構造に対してほとんど影響力を持つことができなかつた理由もここにあったように思う。

(三) 主体性論争の帰趨

梅本によって開始された主体性論争は、マルクス主義内部での論争を引き起こしたばかりでなく、マルクス主義の立場を取らない知識人の間でも活発な論争を引き起こした。主体性論争への参加者は、おおまかに以下の四グループに分かれる。(1) 主体性概念の徹底的対象化を主張し、この概念の科学的基礎づ

けを主張するいわゆる科学主義の立場で、清水幾太郎、宮城音弥らによって代表される立場である。(2)梅本らによる主体性概念の提起の積極的意義を認め、これを自らのよって立つ方法論ないし世界観によって再解釈する立場で、丸山眞男、真下信一らによって代表される立場である。(3)文学における主体性論争は、『近代文学』に依拠する作家・評論家によって主張され、エゴイズムと実感の肯定として展開された。(4)最後に、梅本の主体性概念の提起を哲学上の「修正主義」として批判するいわゆる正統派マルクス主義の立場で、松村一人らによって主張された^二。

実践を支える主体的契機、価値や目的は存在の状態から連続的に生みだされるものであり、社会科学の対象化することができる点で、科学主義の立場(清水幾太郎、宮城音弥)と正統派マルクス主義(松村一人、古在由重)とは共通の立場を取り、ここから主体性論に対する反論を展開した。両者には、社会科学と大衆の生活意識の結合に対するオプティミズムが存在し、これが主体性論者によって提起された問題に対する理解を妨げる主要因をなしていた。

他方、主体性論者の主張は、主体性概念がなぜ提起されなければならないのかという点については明確な主張が見られるものの、この主体性の論理構造の問題、科学的に対象化する主体性と対象化しえない主体性との関係、科学と哲学と世界観との関係などについては十分な説明を与えることはできなかった。

主体性論争が、ジャーナリズムを賑わせていた時期は、わずか三年、一九四七～四九年であった。主体性論争は、敗戦後の民主化過程の中で「民主革命を推進する主体がいかにして形成されるか」というきわめて実践的な問題意識に基づいて提起され、論争された。梅本ら主体性論者は、直接的には、知識人の自立性と倫理的自由の根拠を問うことを通して、問題を歴史における人間の主体性の問題というより普遍的なレベルで提起した。このことの意義は大きい。

またこの問題が、マルクス主義と非マルクス主義の立場に立つ哲学者および

二 松村一人は、正統派マルクス主義の立場から梅本の主体性論に対して全面的批判を加えた。松村の批判は、第一に、倫理的主体性を基礎づける梅本の人間規定が「根源的な利己を含みながら、しかもその否定においてのみ自己の本来性を獲得する社会存在としての人間」という抽象的普遍的規定に置かれており、「人間とは現実には一定の生産関係のうちにある人間、階級社会においては階級的人間であることを忘れてる」(松村 一九四九：四二)という点にあった。松村は、すべての倫理が本質的に特定階級の倫理であることを主張しつつ、梅本の構想する倫理的主体性にはこのような階級的観点が欠如していることを批判する。第二に、労働者階級の階級的倫理にとっては、梅本が個人の主体性獲得に際して見たような「無の論理」によって媒介された個の「死復活」というような断絶は存在しないということであった。「マルクス主義の主体的側面は、労働者階級の利益であり、その解放の必要であり、共同の闘争のうちに形成されていく階級意識、連帯の意識である」(松村 一九四九：五三)。階級的に形成された人間は、その社会的存在に規定されて、搾取のもとになやみ、より幸福な社会への意欲をもち、その変革をはばむ搾取者とその権力への反抗をもち、利害を同じくする者への連帯の感情、献身をもつと主張される。マルクス主義の「主体性」とは、「労働者階級という主体の階級利害という主体性」に他ならない。階級的倫理の立場からすれば、社会的存在と倫理とは切れ目無く連続している。その限り、松村にとって、マルクス主義の中に「無の哲学」によって充填されなければならぬ「空隙」は存在しない。「空隙」は、マルクス主義にあるのではなくて、マルクス主義に「空隙」を感じる者にある」(松村 一九四九：八一)。

社会科学者の間に開放的な意見交換の空間を作り出したことも重要である。同時に、主体性論争の提起者である梅本の構想では、マルクス主義と無の哲学との対話・無の哲学によるマルクス主義の豊富化がめざされていた。この試みは、正統派マルクス主義（その中心は松村一人）から激しい非難の対象となり、論争の過程で梅本自身が松村らの批判を部分的に受け入れて「労働者階級の階級的党派性」の観点から理論を整合化させる方向を取ったことによって、梅本自身によっても十分展開されないままに終わってしまった。報告者は、主体性論争の中に京都学派の哲学とマルクス主義哲学との生産的な学問的交流の端緒を見出すと共に、この論争の終熄の中にそれ以降続く両者の不幸な疎隔状況の始まりを見出している。その意味で主体性論争は、戦後マルクス主義にとって一つの歴史的分岐点であった。

文献

- 荒 正人（一九八三）『荒正人著作集』第一巻、三一書房
- 古田 光（一九七三）「主体性論争(上)」、『現代と思想』第一三号、一九七三年九月
- 古田 光（一九七三 a）「主体性論争(中)」、『現代と思想』第一四号、一九七三年一二月
- 古田 光（一九七四）「主体性論争(下)」、『現代と思想』第一五号、一九七四年三月
- 後藤道夫（二〇〇五）「戦後マルクス主義思想と「近代」」、唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 第一〇号「戦後日本」と切り結ぶ思想』、青木書店、二〇〇五年一〇月
- 後藤道夫（二〇〇六）『戦後思想ヘゲモニーの終焉と新福祉国家構想』旬報社
- 氷見 潔（一九九〇）『田辺哲学研究－宗教哲学の観点から』北樹出版
- 日高六郎（一九六四）「戦後の「近代主義」」、日高六郎編『近代主義』現代日本思想大系、第三四巻、筑摩書房
- 市川 浩（一九六三）「主体性論争」、宮川透、中村雄二郎、古田光編『近代日本思想論争』青木書店
- 伊藤 益（二〇〇五）『愛と死の哲学－田辺元』北樹出版
- 岩佐 茂（二〇一三）「主体性論争で問われたこと」、岩佐茂、島崎隆、渡辺憲正『戦後マルクス主義の思想』社会評論社
- 加茂利男（一九七三）「大衆社会論争－今日の時点での一考察」、『現代と思想』第一三号、一九七三年九月
- 丸山眞男（一九七六）『戦中と戦後の間』みすず書房
- 丸山眞男（一九六一）『日本の思想』岩波書店
- 真下信一（一九四八）「無の実感について」、真下信一他編集『哲学の探究』河出書房
- 松村一人（一九四九）『唯物論と主体性論』日本評論社

- 松下圭一(一九六二)『現代日本の政治的構成』東京大学出版会
- 嶺 秀樹(二〇一二)『西田哲学と田辺哲学の対決—場所の論理と弁証法』ミネルヴァ書房
- 宮城音弥(一九四八)「主体性について」、真下信一他編集『哲学の探究』河出書房
- 清水幾太郎(一九四八)「主体性の客観的考察」、真下信一他編集『哲学の探究』河出書房
- 平子友長(二〇一三)「戦前日本マルクス主義哲学の遺産とそのアクチュアルティ」、岩佐茂、島崎隆、渡辺憲正(編)『戦後マルクス主義の思想』社会評論社
- 平子友長(二〇一五)「戸坂潤における実践的唯物論構想」、藤田正勝(編)『思想問の対話 東アジアにおける哲学の受容と展開』法政大学出版局
- 平子友長(二〇一六)「歴史的存在としての日本マルクス主義」、平子友長、鈴木宗徳、橋本直人、景井充、佐山圭司(編)『危機に対峙する思考』梓書房
- 田辺 元(一九六三)『田辺元全集』第一〇巻、筑摩書房
- 田辺 元(二〇一〇)『種の論理』(藤田正勝編)岩波書店
- 田辺 元(二〇一〇a)『懺悔道としての哲学』(藤田正勝編)岩波書店
- 田辺 元(二〇一〇b)『哲学の根本問題・数理の歴史主義展開』(藤田正勝編)岩波書店
- 田辺 元(二〇一〇c)『死の哲学』(藤田正勝編)岩波書店
- 田中久文(二〇一五)『日本の哲学をよむ』筑摩書房
- 内田義彦(一九六七)『日本資本主義の思想像』岩波書店
- 梅本克己(一九七七)『著作集』第一巻 三一書房
- 梅本克己(一九七七a)『著作集』第二巻 三一書房
- 山崎昌夫(一九六七)「主体性論争の系譜」、住谷悦治他編集『講座 日本社会思想史5 戦後日本の思想対立』芳賀書店
- 座談会(一九四八)「唯物史観と主体性」(座談会：清水幾太郎、松村一人、林健太郎、古在由重、丸山眞男、真下信一、宮城音弥)、『世界』一九四八年二月